

Title	職責全うへ全力疾走
Sub Title	
Author	新田, 敏(Nitta, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1998
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.71, No.6 (1998. 6) ,p.124- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	人見康子先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19980628-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と思われるが、これも一つには、後進の女性研究者が社会へ出るための道を開こうとする、先導者としての彼女の思いやりであったことは確かである。

人見さんは、女性に門戸を開いた慶應義塾に登場した第一期の女子学生であり、第一期の女性研究者であった。慶應義塾大学法学部に就職して以来、定年退職の後も亡くなられるまで、学問の世界から実践の世界にわたり、文字通り常に現役の研究者として最後まで働き続けた人であった。戦後の困難な社会事情の下、劣悪な研究環境を、風のように走り過ぎて行った先輩を、心から哀惜し敬意を表したい。

名誉教授 内池慶四郎

職責全うへ全力疾走

人見先生に初めて教室でご指導いただいたのは三十九年前に遡る。それは私が大学四年生で、民法演習を履修した最初の時間である。当時法律学科の定員は四〇〇人で、この民法演習の履修者の数は一〇〇人前後であったと記憶している。授業開始のベルが鳴って間もなく、細みのスーツに身を包んで颯爽と教室に入って来られたのが人見先生であった。一瞬教室には大きなどよめきが起こった。今では、大学のキャンパスに女性がいるというのは、ありふれた光景となっているかも知れない。しかし私と同年年の女子学生は法律学科全体で二〇人に満たない数であったし、大学一年の私のクラスは男子学生しかいなかった時代である。まして教室で若い女性の先生（三〇才代にはいられて間もないと思われるが、二〇才代にしかお見受けしなかった）の授業を受けるというのは、私

達の大学の常識を超える出来事であったといつてよい。

この時が、確か先生が初めて単独で担当された授業であり、履修者のほとんどが男子学生であったにも拘らず演習の授業をてきぱきと進めておられたことが印象に残っている。

昨年の七月入院される直前に先生から電話があり、通信教育部の学生の最終卒論面接試験に、テーマが「相続と登記」なので、同席してほしいとの申し出があった。お元気のころの先生とは信じられない電話を通しての声音が心に重く残った。九月の下旬になって、事務室から、先生の退院が遅れているので、面接試験を病室で行いたいという申し入れがあるが、私の都合はどうかという問い合わせがあった。この学生は、先生の指導されていた通信教育の最後の学生ということで先生がとりわけ心にかけておられたように伺っていたので、異例のことで、学生の緊張も大変なことと思っただが、病院での面接試験に同意せざるを得なかった。

当日病室に伺うと、案の定学生は非常に緊張していた

が、先生の方は、入院当初よりはやお元氣そうで、論文の基礎的部分と学生の自説の部分について、的確かつ厳しい質疑をされていた。場所柄もあつてやや手控えていた私としては、先生のこの職責を果たそうとされる氣力に完全に圧倒されていた。考えてみれば、初めて私達の授業を担当された先生の最初の時間から、学生の前で先生と同席したこの最後の時まで、学生に対するときの毅然とした姿勢はもとより、教師としての職責を果たすということはどういうことなのかを、身をもって教えていただいたように思う。

新憲法のもと、我が国で初めて男女平等が制度化されて、その第一線に立つて常に全力疾走されて来られた先生には、私たちの想像を超える強い決意がおりになったことと思われる。この病室での光景は、何時迄も私の心から消えることは無いであろう。

先生どうか安らかにお休みください。

法学部教授 新田 敏